

少子化時代の老後



illustration : sakuma kana

静

子様(89歳)は大きなお屋敷の一人お嬢様としてお育ちになりました。

大正十四年のお生れですから、小学校に入学をされた時から女子短大を御卒業になる時まで、ズーツと戦争中の時代を学生としてお過ごしになったのでございます。

小学生の頃はそれでも、一

ムコ養子として迎えられ、お屋敷の敷地内にお二人の新居を建築されて、結婚をおさせになったのでございます。

しかし、お母様はどうした事か、最愛の娘をムコ殿に奪われたと想われ、「認知症」を発症されて、ちよつと眼を離すともうお屋敷を脱出されて行方不明になり、警察の御協力を頂いておさがしするのですが、埼玉県の奥とか、八王子の近くとか、神奈川県のはずれ等、どうやって歩いて行かれたのかと驚くばかりで、その上発見されずのは大体夜中になります。それまで気が

中でお迎えに行かねばなりません。御家族の方にもとても大変になったのでございます。一番大変でしたのはお米屋さんにお米を14kg御注文になり、そのお米の中に猫のトイレ用の砂をいねいに混入された事でございまして。お米を14kgも捨てる事は出来ません。色々洗ってみるとか、ふるいにかけてみるとか、手をつくしてみましたが、どうしても砂とお米を分離さ

せは戦地の兵隊さんにお手紙を書くために!!とか、慰問袋の中にはかならずお手紙を入れてみましょう!!等と、学校で指導があり、そのお手紙には自分達の日頃の生活の話とか、兵隊さんのおかげで毎日が無事に暮せる事への感謝の気持ちなどを書くように!!と指導があり、少しはお授業らしい

応は戦地の兵隊さんにお手紙を書くために!!とか、慰問袋の中にはかならずお手紙を入れてみましょう!!等と、学校で指導があり、そのお手紙には自分達の日頃の生活の話とか、兵隊さんのおかげで毎日が無事に暮せる事への感謝の気持ちなどを書くように!!と指導があり、少しはお授業らしい

せる事が出来ません。炊き上げますと、ジャリジャリの砂混じりの御飯は食べられませんが、とうとう仕方なく近くの養鶏所の方に訳を説明しまして、差上げますから引取って頂けませんかとお願いをしました。養鶏所の方は「とり」に白米を食べさせると健康上被害があるとブツブツ言われませんが、とにかくお願いをして引き取って頂きました。

毎日がこんな具合でお父様はすっかりクタビレられたのだと想います。脳梗塞を発症されて突然にバツリ倒れて御他界になってしまわれたのでございます。

御夫君はお母様と静子様がよく似ておられると想われるもので、その内に静子様も同じ様になるはずだと想っておられます事を知り、静子様は心よく想われず或る日口論となり、お二人の間はシツクリ行かなくなりまして。御夫君は静子様があまりに気がお強いものでますますイヤになられまして、とうとう弁護士さんを通して離婚をお申し出になられたのでございます。大

変でもありました。静子様は御夫君には一円も残らないよう奪われたのでございます。お二人の間にはお嬢様がお生れになっておられましたが、御夫君は静子様がお独りでは淋しくて生活できないであろう事を案じられ、最愛のお嬢様も静子様の側にお残りになりました。やはり御夫君は御父様がお選びになられただけの御立派な殿方で、御自分がどんなに辛くても静子様の心やお嬢様の心の内側の事を案じてお嬢様を静子様の手許に置かれたのでございましょう。

娘も息子も同じようなものかも知れませんが、特に娘は結婚して夫の許に嫁ぎますと身も心も夫に同化しますので、どんなに最愛の娘であっても今までの娘とは別人格の娘になります。その時、静子様は間違いなく独りになられるので

娘と同居していても娘の心が離れてしまいますので孤独になります。おそらく静子様には独りだけの生活は無理であろうと考えられ、苦しい選択をされたのでございますが、

戦争はますます激しくなりましたので、国民総力戦!!との教育で勉強とは無縁の生活になったのでございます。

最後の頃は学校の教室そのものもお国のための工場として使用されるようになり、静子様はチャンとした学生生活とか勉強とかを受けられた事がありませんでした。

静子様にはその点はお解りにはなりません。この相手の複雑で深い気持ちの御理解にもなりませんはずでした。しかし現在、お嬢様に恋人がお出来になり結婚されました。

静子様はお隣りにお嬢様とピツタリ続きの御新居をお建てになりお住いでございます。静子様はお嬢様が大嫌いでいらつしやいます。当然お嬢様も静子様が大嫌いで、お隣りでもお母様をお訪ねにはありません。

現在は何故か静子様は歩けなくなりました。寝たきりの御生活になりました。

通いホームヘルパーさんが朝夕二回、お清拭とオムツの交換に通って来ますが、朝の時には医師の方が一緒に来られて、お腹の装置に点滴用の

その頃は勉強をする者は非国民!! 一生懸命に工場で働く者がよい国民だったのでございます。お父様はそれらの事を案じられまして、「静子は郵便局へも独りでは行けないのではないか?」と心配されて、安心できる家庭を早く持たせよう!!と、東大理学部を卒業のエンジニアの立派な男性を

水分と栄養剤をつないで行かれます。お食事は召し上がりませんが、これで一年以上は大丈夫なのだ、ヘルパーさんの説明でした。眼も耳も頭も正常でも歩けない生活は大変だろうとは思いますが、現在のベットは自動的にローリングをしますので床ずれはありません。

お嬢様はお独りで早朝からお母様のお宅と御自宅を行き来して、眼が廻る程の忙しさで走り廻っておられますが、そんな中でもホームヘルパーさんにもキチンと指示をされますし、報告も受けられます。しかしお母様とお話をする時間等の余裕はおありになりません。

少子化時代の老後は、孤独に耐えることなのだ!!と想ったのでございます。

岩城祐子

大正13年栃木県生まれ、昭和54年に都市型有料老人ホームの先駆けとなる施設を開設。平成13年に特別擁護老人ホームを、平成18年に高齢者長期滞在型ホテルを開設。独特の語り口調が特徴で、著書多数。